琉球新報 2015/09/21 朝刊 P11 文化

島嶼防衛と住民

与那国は今 <下>

観光客は戻るのか

漂流する「自立ビジョン」

池尾 靖志

「最西端の島」与那国。かつては、台湾との交易で潤い、1947年の人口は1万2千人だったが、施政権が日本に返還された1972年に約2600人、今年8月末日の時点で1484人となっている。台湾との交流がほとんどなくなり、日本の「行き止まり」になってしまったため、過疎化に拍車が掛かっている。「この状況をなんとかしたい」。これは、島の住民であれば、誰しもが願う一致点である。しかし、過疎化を食い止める手段をめぐり、島は分裂した。

自衛隊で人口増

一つの考え方は、「国境の島」としての役割を果たすことを強調し、自衛隊を誘致することで人口増を図るという考え方である。当然、これにはリスクも伴う。海上保安庁による警察行動による国境管理ではなく、自衛隊という米軍との一体運用を図ろうとする組織による監視体制では、軍事衝突も起こりうるからだ。

現在、与那国では、三つの大型建設工事が進められている。製糖工場の新築工事（約28億円、工期は12月中旬まで）、祖納港の港湾工事（数十億円、10月ごろまで）、そして、自衛隊の基地建設工事である。当然、作業員の食と住を考えなければならない。

製糖工場新築と港湾工事の関係者により島の民宿はほぼ満室で、観光客も泊まる場所がなかなかない。そのため、自衛隊基地建設工事の関係者は、駐屯地のグラウンド予定地にプレハブを建て、そこを宿舎として使っている。現在、265人が入居して工事に当たっているとのことだが、本格的な本体工事に入ると、さらに増設して、最大500人の作業員を宿泊させる予定だという。島への交通手段である飛行機も、工事関係者が多いためなかなか予約が取れない。「日本最西端の島」としてリピーターに支えられてきた与那国の観光だが、リピーターが島に渡ることも宿泊することも困難になっているのである。

だが、先に述べた二つの工事は、ほぼ年内に完成する。また、自衛隊基地が来年3月に完成すると作業員はいなくなる。

漁業と観光業で成り立つ島の将来はどうなってしまうのか。与那国島の中でも、絶景の景観である南牧場に自衛隊が配備され、そこで軍事訓練が行われるとしたら、そこに新たな観光客は来るだろうか。一連の工事が終わり、民宿や飛行機の手配がしやすくなる来年以降、再び、リピーターとして与那国を訪れるだろうか。一度失った観光客を取り戻すのは困難を極めるのではないか。

与那国では毎年、「日本最西端国境の町を走ろう」をキャッチフレーズにした、与那国島一周マラソン大会が開催されているが、今年は、参加申し込みが例年の半分程度しかなく、締め切り8月末から9月末に1カ月延長している（開催は11月14日。その日はチャーター便が運航される予定）。

「国境交流特区」

もう一つの考え方は、与那国を「交流の島」と位置づけ、台湾・中国から沖縄・奄美・九州へと向かうルートの中に位置づけようとするものである。日本最西端の先は行き止まりとなれば、与那国は、単なる「国境の島」にしかならない。

だから、交流・交易の拠点として位置づけて、経済交流を促そうとする考え方である。そのためには、与那国島自体が自立した観光拠点とならなければならない。

実際、与那国町は04年に自立の道を模索していた。与那国町は、「平成の大合併」の時、隣の石垣市にのみ込まれることを恐れて、中学生以上の全町民を対象に04年10月に住民投票を行った。投票率70・4％、合併賛成327票、反対605票という結果を受け、八重山地域（石垣・竹富・与那国）の合併に「ノー」の意思を示した。

この路線を進むべく、与那国が自立するための条件を探るために、05年2月、「与那国自立ビジョン支援・東京会議」を、政界有力者や学識経験者、ジャーナリストを呼んで開催した。

そして同年3月に、『与那国・自立へのビジョン 自立・自治・共生・アジアと結ぶ国境の島YONAGUNI報告書』が発表された。今後のボーダーレス化／グローバル化を踏まえ、「辺境の島」から「交流の島へ」、「依存型経済社会」から「自立ネットワーク型経済社会」への転換を図ることが記された。

こうして与那国町は、台湾や中国、東南アジアなど世界の国々と自由に往来する「交流の島」として、「国境交流特区」を申請し、06年3月には、「与那国・自立ビジョン」を与那国町として打ち出した。

また、07年10月4日には台湾・花蓮市へ姉妹都市締結25周年を記念して友好親善交流団128人を、与那国空港から直行チャーター便によって送り込んだ。この後、08年、09年にもチャーター便を試験的に運航させるなどの努力を重ねた。しかし、「国境交流特区」は認可されなかった。

「自立ビジョン」は、自衛隊誘致に活路を見いだした外間守吉町長の下で「島づくりの大きな要素となる陸自沿岸監視部隊の配備は、街の自立に係る状況が変化する」とされ、新たな計画を策定していくこととされている。

今まさに、与那国が、そして、南西諸島が、岐路に立たされている。

（立命館大学非常勤講師・平和学）

グラウンド用地に建設されている自衛隊基地の建設作業員用の仮設宿舎＝与那国島、9月上旬

©琉球新報 無断複製・転載を禁止します